RoyalBitch

# 水中ぼんれす

18歳未満の
購入・閲覧禁止

ふうまの一族は壊滅した。
生き残ったのは二人だけ。頭領の息子である俺と、
部下の時子だけだ。

この国の闇は、三つの勢力が取り仕切っている。
対魔忍、米連、魔族。
俺はふうまの一族を再興させるべく動き出した。
三つの勢力のことごとくを屈服させ、
俺がこの国の闇を牛耳る。
俺と、時子が。

そのために、
俺は、
時子を孕ませることにした。

組織の戦力は着実に増している。
だが、一族の再興のためには"次世代"が必要だ。
それも、ふうまの血を濃く受け継いだ次世代が。

時子に自分でスカートをたくし上げさせる。
はちきれそうな胸のボタンを外すと、
豊かな乳房がこぼれた。
「ずいぶん乳首がたっているようだが」
「…はい」
「期待していたのか？」
「そ…そのようなことは…」
言葉を濁す時子の乳首をねぶり上げると、
時子は熱い吐息を漏らした。

時子に股をひらかせ、じっくりと弄る。
「あの…御館様。御戯れもほどほどになさいませ」
「そうか。ならもう少し続けてみよう」
「……」
ん…
「お前は少し怒った顔が一番可愛いからな
「その手には乗りません」
「そう、その顔だ」
「……」

「んっ……く…」

押し殺した喘ぎが時子の口から漏れる。

「我慢しなくていい」

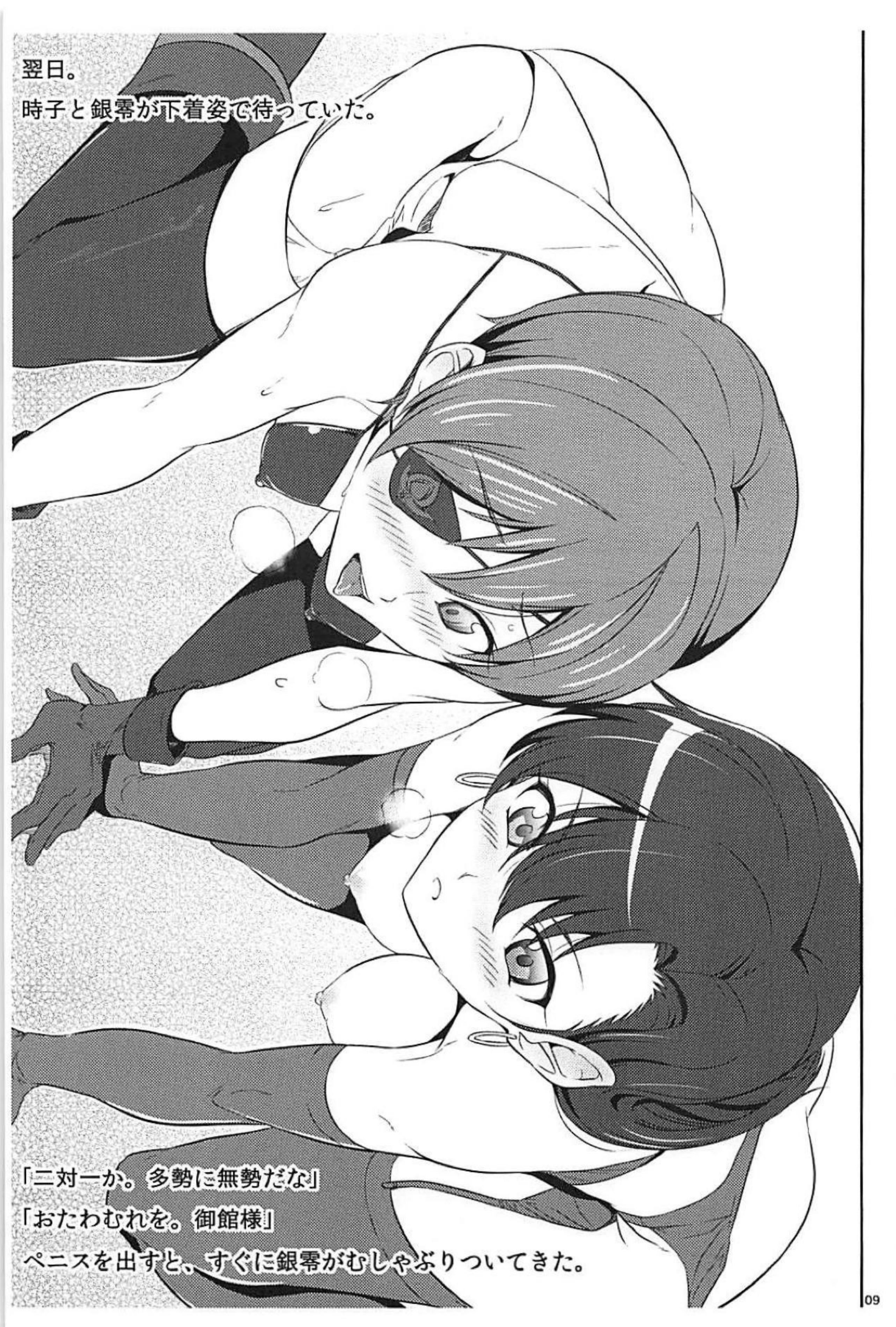
「は……はいっ……」

「俺とお前だけだ。他には誰もいない」

「ぎょ、……御意っ……」

時子の漏らす声は次第に甘く、高くなり、やがて絶頂に達した。

「これから毎日種付けをする。孕むまでな
「……御意に」
「俺の子を生んでくれ。時子」
「……はい、御館様」
抱き寄せた時子の顔には
柔らかな表情が一瞬浮かんだが、
すぐにいつもの生真面目な表情に戻った。
「御館様。種付けには、銀零を加えていただきたく」
「銀零を？」
「あれもふうまの血の女です」


翌日。
時子と銀零が下着姿で待っていた。
「二対一か。多勢に無勢だな」
「おたわむれを。御館様」
ペニスを出すと、すぐに銀零がむしゃぶりついてきた。

銀零は見たものを凍らせる魔眼を持つ。
対象をスコープ越しに
凍結させることで動きを止め、
その隙に銃弾を撃ち込む。
銀零は米連でも名うての狙撃手だった。

「あっ、あひっ♪御館様のゆびっ
きっ、きもひいいっ♪」

かつての兵士の面影はもはやない。
今の銀零は、
快楽を貪るだけのメス犬だ。

「準備はいいようだな」
「はっ、はいっ！おっ…御館様の子種っく、くださいっ」
銀零は下品に尻を突き出してみせる。
はっ♥
はっ♥
「…これもお前の仕込みか？時子」
「御館様ご自身が調教なさったのでしょう？」
時子はあきれたような声を出した。

「あっ、あひっ！あっ、あっ」
一心不乱に腰を振る銀零。
おちっ
おちんぽ♥
あ♥
あ♥
あ♥
あひ♥
ズ
ン
時子の視線も熱を帯びる。
「すぐにお前の子宮も精液で満たしてやる」
「……御意」

あふれるほどに膣に精を注がれ、二人は荒い息を吐いている。

「明日も同じ時間に種付けを行う。体を休めておけ」

「はい、御館様……」

ふうま一族の再興まで、二人には
この先何度も孕んでもらうことになるだろう……。

ときこぼん

発行日　2014年8月17日
発行者　haruhisky
発行元　ろいやるびっち
連絡先
blog：　http://blog.livedoor.jp/haruhisky
pixiv：　http//www.pixiv.net/member.php?id=4956073
twitter：　@haruhisky1

RoyalBitch

# ときこぼし